

同窓生のかなりの人が教えを受けた物理学科の江沢洋先生が 2023 年 9 月 10 日に逝去されました。享年 91 歳でした。先生の経歴、業績を紹介し、先生がいかに優れた研究者であり教育者であったかを述べ、その死を悼むというのが通常の追悼文の形なのでしょうが、「そんなの中村さんらしくないよ、僕も嫌いだ」と先生に言われそうなので、別の形で私なりの偲ぶ気持ちを書いてみたいと思います。

既にご存知の同窓生もいるかもしれませんが、先生が 85 歳の年に刊行が始まり米寿の年に完結した全 6 巻の『江沢洋選集』という書物があります。この中には、20 代の頃の著作からこの選集のために書き下ろしたもので、先生が生涯にわたって書かれた論説・解説・エッセイの中から、先生と上条隆志さんのお二人が選んだ 145 編の文章が収録されています。いわゆる学術専門誌に発表した論文や専門家を対象にした学術書など研究者としての先生がなされた沢山のお仕事はこの中に含まれていませんが、人生の終わりにこの選集を作ろうとお考えになったことから、ここに収録されている類のお仕事を狭い意味の研究活動とならべて同じように大切なことと先生は考えていたのだと思います。そんな文章を書くエネルギーと時間があるのなら、もっと専門の研究に集中すべきだという人もいます。これは学問感、人生観の問題であり議論をしてもしょうがないことですが、物理学は美術や音楽と同じように人類の精神活動が作り上げてきた文化の一部であり、多くの人たちがその楽しさや美しさを享受する環境を作ることは専門家の大事な仕事なのだというのが先生の信念でした。もちろん、研究の場面での先生の集中度、執念は、いくつかの論文と一緒に書いた私の経験でも時には辟易するほど凄まじいものでした。要するに、先生は両方ができる人だったということです。

上述の選集は、インターネットで『江沢洋選集』と入力し発行元の日本評論社のページを開けば、目次を見ることができます。目次を見るだけでも、その量、質、テーマの広さに圧倒されます。私はかなりのものを初出の時に読んでいたのですが、先生がお亡くなりになった後、あらためて選集を書棚から取り出しあちこち拾い読みし、いろいろなことを先生と議論した場面を思い出してしみりすることもあります。同窓生の皆さんの多くは、必ずしも狭い意味の物理に限らず様々な分野で活躍されていると思いますが、どなたにも読んでみたいという表題が目次の中にいくつか見つかるのではないのでしょうか。ぜひ本を入手して読んでみて下さい。

また、この選集の各巻には先生とゆかりの深い 6 人の方々の書いたエッセイが載せられていて、様々な側面から見た「江沢論」になっています。物理学科の田崎清明先生の書かれたエッセイの中のエピソードなど思い当たる同窓生もいるのではないのでしょうか。

先生とのお付き合いは 60 年以上にわたるので、私自身の思い出を語りだしたらいくらスペースがあっても足りません。最後に、同窓生の一部の人々とも共有する思い出の

一つを紹介して先生のお人柄を偲びたいと思います。

学習院で、時間制限なし、ノートでも本でも分量無制限で持ち込み可という試験を先生が行ったというエピソードです。私も試験監督を手伝ったのでよく覚えています。試験と言えば、「はい時間です」と言われしぶしぶ未完成の答案を提出した経験を小学校以来つづけてきた学生さんは、さぞびっくりしたのではと思います。確かに試験というものの常識を覆すやりかたですが、ある意味で先生の哲学の一つの表現だったのだと考えます。物理の問題を解くというのは手持ちの道具と知識をフルに使って徹底的に考え抜くことだ。それには時間制限などないのだというのが先生の考えです。

この考えは先生ご自身の研究活動でも貫かれています。私もいくつか先生とご一緒に論文を書いたことがあります。考えに考え抜く先生の姿勢に圧倒されることが屡々でした。しかも考え抜くことは先生にとって苦行ではなく、むしろ楽しんでおられるように見えました。時間制限などないという姿勢は個々の研究についてだけでなく、生涯を通じての先生の研究歴にも貫かれていたことは、米寿の年に刊行された『ブラウン運動』という御著書の一つ見るだけでもわかります。定年後も続けられたオリジナルな研究の成果をも含んだ本格的な専門書です。先生には、歳だからもう仕事を離れてゆっくり余生を過ごそうなどというお考えは毛頭なかったようです。今頃は天国で神様を質問攻めにして、いつものように議論しているのではないかと想像します。心からご冥福をお祈りします。